

林明德 安奉鐵路改革与抵制日貨運動

王樹槐 基督教教育会及其出版事業

張朋園 広智書局（一九〇一—一九一五）——維新派文化事業機構之一

呂実強 周漢反教案

張存武 清代中韓邊務問題探源

魏秀梅 從量的觀察探討清季布政使的人事嬗遞現象

王爾敏 China's Use of Foreign Military Assistance in the Lower Yangtze Valley, 1860~1864.

(書評は省く)

(學術報導)

申淑雲 中央研究院近代史研究所圖書資料簡介

△集刊第三期・上冊（民國六一年七月一日）

梁敬錚 開羅會議之背景

王樹槐 庚子地方賠款

王爾敏 晚清政治思潮之動向

張玉法 外人与辛亥革命

黃福慶 五四前夕留日學生的排日運動

李國祁 明清兩代地方行政制度中道的功能及其演變

陶英思 蔡元培与大学院

李陳順妍 晚清的重商主義運動

李應福

The Chekiang Gentry-Merchants vs. the Peking

Court Officials: China's Struggle for Recovery of the British Soochow-Hangchow-Ningpo Railway Concessions, 1905-1911.

Thomas L. Kennedy: The Kiangnan Arsenal in the Era of Reform, 1885-1911.

以上のように、例外的に明代より清代前期に関する論文も含まれており、また現代史に関するものも稀にはあるが、殆ど大部分は近代史の論文である。内容的にもかなりバラエティに富んでおり、なかなかの大作も見られる。ただ本『集刊』は創刊が新しいためか、わが国の近代史研究者に見落されている嫌いがあるので、敢て紹介の労をとったわけである。

(1) 集刊第二期、申淑雲「中央研究院近代史研究所圖書資料簡介」によれば、近代史研究所の蔵書数は、民國六〇年四月現在で五〇、一二九冊、内訳は中文四〇、〇〇〇冊、西文六、六六二冊、日文三、四六七冊となっている。

(2) 註(1)に挙げた申淑雲の報導によれば、近代史研究所に収蔵されている檔案の内容について、具体的に説明されている。檔案の大部分は、勿論外交檔案であるが、その他に多少の經濟檔案、朱家驊(前院長、故人)檔案がある。

(3) 中国近代史専門の學術誌としては、『中国科学院歴史研究所第三所集刊』があるが、一九五五年に第二集が出て以来、現在に至るまで杜絶している。

匈奴史関係史料

護 雅 夫

本書は、序文(三—三三頁)に於いて、本文として、「紀元前一〇一年に至る、すなわち、匈奴国家の形成に先立つ時期から、内紛と漢の武帝の侵略的遠征との結果、同国家が衰退しはじめるときまでの、遊牧民族匈奴の歴史を伝えた中国諸史料から基本的報道」を集めてロシア語訳し(三四—一六頁)、それに、きわめて詳細な注(一一七—一七四頁)と文献目録(一七五—一七六頁)とを加えたものである。

いままで、ロシアソ連の学者が匈奴史について叙述するさい、ほとんどつねにその根拠としてきたのは、ピチューリン(Bliūrin, N. Ya. [Iakin])が一八五一年に出版し、一九五〇年に再版された *Sobranie svedenij o narodax, obitavšix v Srednej Azii v drevnie vremena, Moskva-Leningrad.* であり、訳注者タスキン(Taskin, V. S.)は、序文で、「ピチューリンの労作の出版以来、きわめて長い年月が経過したため、当然のことながら、とくに考古学・民族

学・歴史学・言語学その他の諸科学の進歩に関連して、彼の翻訳にたいして異なった評価が要請される」と言い、「ピチューリンの翻訳の最大の諸欠点」として、まず、(1)彼が、翻訳に先立って当然行なうべき原文にたいする検討に注意を払わず、そのために多くの誤謬を犯したことを指摘し、ついで、(2)彼の重大な誤訳が、その著書を全面的に利用する「今日のソヴェートの考古学者・民族学者・歴史家たちを誤解に陥れる場合が少なくない」ことをのべて、その若干の例をしめし、さらに、(3)彼の翻訳に注がほとんど付けられていないこと、(4)脱落が多いこと、(5)中国の官名が省略されているか、翻訳されていないこと、——これらをあげ、「いま列挙した諸欠陥からしても、ピチューリンが行なった、司馬遷『史記』匈奴列伝の翻訳の再検討が不可欠なことは明らかである」としている。

のみならず、匈奴史をよりよく理解するためには、「匈奴史に直接関係する諸資料を、自らの活動によってこの民族の歴史ときわめて深い関係を持った各個人の列伝の翻訳によって補足」せねばならぬ。本書が『史記』^{卷一〇}匈奴列伝の訳注(翻訳、三四—六二頁。注、一一七—一五一頁)を主としつつも、それに、「付録」として、『史記』^{卷八}李牧列伝(廉頗藺相如列伝付伝)、^{卷九}韓信列伝、^{同卷九}劉敬列伝、『前漢書』^{卷五}韓安國伝、『史記』^{卷一}衛將軍驃騎列伝、^{同卷一〇}李將軍列伝、

同卷一主父偃列伝の訳注（翻訳、六三—一六頁。注、一五—一七四頁）が付せられているのはそのためである。

ついでタスキンは、「紀元前六世紀には、中国の北方の隣族がすでに典型的な遊牧民であった」ことをのべ、この遊牧民と農耕民——中国人——との間に存在した敵対関係とともに交易・外交関係にも注目せねばならぬと言つて、『史記』・『漢書』に抛りつつ、武帝の死に至るまでにおける、匈奴と、主として秦・漢西帝国との関係史をくわしく綴り、序文を終えている。

本文は、上述のように、『史記』匈奴列伝、および、匈奴史を語るに当って無視しえぬ人々の列伝の訳注から成る。

タスキンが本書の最大の目的の一つをビチューリンの著書の再検討においてだけあつて、彼の翻訳は、全体としてこれを見れば、ビチューリンのそれに比べてはるかに正確かつ綿密である。いま、匈奴列伝の訳注から二、三の例をあげておく。

ビチューリンは「後百有余年趙襄子諭句注而被并代以臨胡貉」の句を、「さらに百年たつて、趙国の王の襄子は、句注を越えて、晉国の軍隊を破り、代地方を占領し、Semio族と接近した」と訳しているが、タスキンは、この翻訳は「文法的・歴史的に見て正しくない」と言ひ、『漢書』に拠つて「破」字の下に「之」字を補ひ、「この『之』字が（中略）これに

先行する句中にのべられている戎と翟とである」ことを指摘して、上の一句を、「さらに百年余りたつて、趙襄子は句注〔山〕を越え、〔戎と翟とを〕破り、代〔王国〕を併合し、胡と貉とに直接あい接するに至つた」と訳している。すでに李笠がのべているように、『破』の下に、『漢書』に抛りて『之』字を補わば、句読おのずから明らかなり」と言うべきであつて、しかも、タスキンが「之」を「戎翟」と解したのは正鵠を得ている。

また、「宣太后詐而殺義渠戎王於甘泉」の句中の「甘泉」を、ビチューリンは、宮殿の名前ととつているが、タスキンはこれを「甘泉〔山〕」と訳し、それに付した注で、ビチューリンの意見は「明らかに誤っている。何となれば、甘泉宮は、ずっと後、紀元前二二〇年になつて、始皇帝によつて同名の山上に建てられたものであるからである」と言う。甘泉宮が始皇帝の二七年（紀元前二二〇年）に、咸陽の西北の甘泉山に造営された宮殿であることは周知の事実である。

さらに、匈奴の法律に関して「抜刃尺者死」とある一句を、ビチューリンは、「鋭い武器および寸（フィート）を抜いた者には死」と翻訳し、これに、「寸」と呼ばれているのは、棒状で、長さが約一寸（フィート）半およびそれより短かい鉄製武器である」という説明を加えている。このビチューリンの翻訳・解釈が誤りで、上句が、正しくは、「刃を〔鞘か

ら」一フィート(尺)抜く者は死刑に処せられる」と訳さるべきことは、タスキンの説く通りである。しかし、上述のビチューリンの訳語は、*ベルンシュタム* (Bernstam, A.N.)、*ルデンコ* (Rudenko, S.I.) をまどわせ、彼らの誤解をまねくことになった。すなわち、*ベルンシュタム* は、「尺」の語彙についてながながとしたのち、結局、*ビチューリン* に従って、上の句を、「理由なしに」刀と棍棒とを抜く者は殺される」と訳し、ここにいわゆる「棍棒」を、*ノインーウラ* の諸タルガンから発見されたブロンズ製棍棒のことと考え、*ルデンコ* もこれに賛意を表するに至ったのである。

もう一例だけあげておくと、*ビチューリン* は、匈奴の墳墓についてしるされた「而無封樹」という句を、「しかし、周囲に樹木を植えた墓地は存在しない」と訳している。これにたいして、*タスキ* は、「このような解釈をすれば、匈奴の墳墓の外的標識に関する重要な指摘が脱落してしまふ」と言い、これを「しかし、墳丘を築かず樹木を植えぬ」と正し、さらに、「もし、匈奴の墳墓には外的標識がない、という司馬遷の主張が正しいとすると、形式上、これにもっとも近いのは、一九〇二年に発見されたオグラフティンスキイ墳墓である」とのべて、同墳墓について簡単に紹介したあとで、「埋葬地域を示さぬ慣習は、ほかの遊牧諸族、とりわけヨーロッパのフン族、モンゴル族において認められている。この慣習

は、おそらく、墳墓を掠奪から守ろうとする願い、また、死者の靈魂——生存者がそれとのあらゆる関係を絶とうと努めた——にたいする恐怖の念と関係がある」と推測している。以上、ごくわずかの例をあげたにとどまるが、これらだけによっても、*タスキ* の訳語が *ビチューリン* のそれにまさっていることは明らかかと思う。

いや、このことは、*ビチューリン* の訳語との比較においてだけではなく、或る点では、*内田* 氏のそれと比べてみても言いうるようである。*内田* 氏が、すでにあげた「趙襄子隴句注而破并代以臨胡貉」を、「趙襄子は句注山をこえて代を攻破併合し、胡貉と境を接するに至った」と訳しておられるのは、「之」字を挿入して翻訳した *タスキ* の見解におよばないであろうし、また、これまた上に例示した「殺義渠戎王於甘泉」の甘泉を「甘泉〔宮〕」と理解しておられるのは、不注意からする誤りではあるまいか。べつの一例をあげておられるなら、冒頓単于の征服活動の一つとして見えている「南并楼煩白羊河南王」の句を、*内田* 氏は「南の方、楼煩〔部族〕の白羊河南王を併合し」と翻訳しておられるが、*タスキ* は、これを、「南方では、黄河の南方に在って、楼煩・白羊〔諸部族〕王に属した土地を併合した」と訳している。私は、これについても、むしろ *タスキ* の訳語をとりたいたいと思

タスキンがピチュリーンの誤訳・誤解を正している箇所は、これらのほかにも多い。しかし、逆に、ピチュリーンの翻訳の方が当たっているのではないかと、思われる場合もないではない。ただ一例だけをしめすと、匈奴の祭祀を「秋馬肥大会蹄林」とあるが、ピチュリーンは、この一句を「馬が肥える秋には、すべてのものが集会して林をまわる」と訳している。これにたいして、タスキンは、「しかし、じっさいは、漢文テキストにはつぎのようにのべられている」と言い、これを、「馬が肥える秋には、蹄林での大会に集まる」と翻訳している。しかし、「蹄林」は、すでに顔師古が「林木をめぐりて祭るなり」と注し、江上波夫氏がくわしく論証し、そして、内田氏が従われたように、「林を馳回する祭礼」と理解すべきであろう。この点、翻訳としては、ピチュリーンのそれがより正しいが、ただし、ソ連の学者の中に見られるように、このピチュリーンの訳文を、「匈奴において、勢子の包圍による狩獵が存在した証拠」とするのは、いままでもなく誤りである。

とにかく、全般的に見れば、タスキンの意見は、正しい場合が多いが、そうかといって、彼の訳語・解釈に異論の余地がまったくないとは断言しかねる場合もある。これまた一例をあげるにすぎないが、司馬遷が匈奴の奇畜の中に数えている「驢・羸・馱駝・騊駼」を、ピチュリーンは、ただ

「驢馬、騾馬 (osak. 英語 hiny. 牡馬と牝驢馬との雑種)、および、血統のきわめて良い馬」とだけ訳している。ヘルンシュタム、グミリオフ (Gumilev, L.N.) は、この訳文をそのまま引用し、また、ルデニコは、「ここで血統のきわめて良い馬と呼ばれているのは、アルタイ地域の諸族長の墳墓の発掘のさい発見されたような、丈の高い駿足の馬のことである」と言っている。これにたいして、タスキンは、「しかし、ピチュリーンの翻訳ともとの漢文とを比べると、後者には『血統のきわめて良い馬』という語がなく、ただ三種類の家畜の名前が見えるにすぎぬことがわかる」と言い、「馱駝」を「騾馬 (Bull. 英語 hite. 牡驢馬と牝馬との雑種)」、「騊駼」を「丈の低い野生馬」、そして、「騊駼」を「クラン(野驢)」と訳した上、それぞれを古代チュルク語の *patar* (騾馬) その他の音写とし、このように「チュルク語の単語が匈奴語中に見られることは、何らかの程度において、匈奴の人種起源問題の解決に寄与する」とのべている。しかし、ピチュリーンは、おそらく、徐広が「馱駝」に注して「北狄の駿馬」などと言っているのによって、「馱駝」を「血統のきわめて良い馬」と訳し、そのあとの二種類の家畜名は、ともに不明だったため、これらを故意に省略したものと思われる。江上氏は、「騊駼」は「ブルジュワルスキー馬(矮小な野生馬)」、「騊駼」は「クラン(野驢)」を指すと言い、これらについてはタ

メスキンと意見を同じくしておられるが、「馱駝」に関しては、これを、ピチュエーリンとほぼ同様に、「西方伝来の駿馬たるアリアン馬」、つまり、いわゆる「汗血馬」と考え、内田氏もこれに従っておられる。このように、少なくとも「馱駝」がいかなる家畜であるかについて意見が分れているとすれば、「馱駝」を古代チュルク語の *baydar* の音写とし、これを「匈奴の人種起源問題」を解決する一拠とするのは、いまだ時期尚早であらう。

さきにも触れたように、本翻訳には、きわめて詳細な注が付けられている。タスキンは、三八一個に達する注において、原文中のほとんどすべての地名を今日のそれに比定し、人名・官名などについて一つ一つ説明を施すのはもちろん、自己が与えた訳語・訳文の根拠を、きわめて多くの古典、それらに付けられた古人の注釈、あるいは『史記会注考證』その他によりつつ明らかにし、また、『史記』にはしるされていないが、『前漢書』には見える記事は、これを訳出し、さらに、ソ連における匈奴史研究家の説の誤りをこまかく指摘し正している。その指摘は、私の見るところ、大体において肯綮に当たっている。

いま一例として、冒頓に関するベルンシュタムの見解と、それにたいするタスキンの意見とを紹介しておく。

ピチュエーリンは、冒頓の行動・生涯と、チュルク民族の英雄

批評と紹介 護

叙事詩オグズナーメの主人公オグズカガン(Oguz Kayan)のそれとの間の酷似——父子間の対立、子供の手による父の殺害、征服戦争・遠征の連続など——に注目したが、ベルンシュタムは、とくに考古学的資料に拠って、上述の類似から、つぎのような説を引き出した。すなわち、ノインウラの第六号墳——ベルンシュタムは、これを鳥珠留若鞮单于(在位、紀元前八年—紀元後一三年)の墳墓と考えた——から、牡牛—ヤクの像を持つ銀板が二枚発見された。ベルンシュタムは、「鳥珠留若鞮单于是(中略)匈奴部族同盟の建設者である頭曼と冒頓とを祖とする匈奴の貴族的氏族、つまり、匈奴においてもっとも高貴な氏族に属した」が、その氏族は「呼衍」という名称であった」と言い、この呼衍氏族のトータム獣こそ、上述の銀板上に認められた牡牛にはかならずと考える。そして、彼は、「呼衍」の古代音は *(*) Hoarai* で、これから、チュルク語の *oγuz*——彼によれば「牡牛」を意味するという——の祖形であるモンゴル語の *ükter* (「牡牛」) が形成されたとのべたあとで、「もし、この貴族的氏族の名称が『牡牛』であったとすれば、この氏族の族長——系譜の子孫——は、自分の個人的名前—異名のほかに、自分の氏族名によっても呼ばれる完全な権利を有した。彼は『姓と名前』を持ち得たのである。匈奴部族同盟の事実上の建設者の名前は冒頓(Bayantur)、姓はOγuzで、その姓名を逐語訳

すれば『牡牛 (Oruz) 英雄 (Bayatur)』であった」と言ふ、要するに「Oruz Qazan は匈奴の出で、彼の種族が伝えたその生涯と、冒頓の生涯との酷似から、我々は、これら二つの伝記は、まったく同一の歴史的事実在人物のそれが両様に伝えられたものであると言いうる」と断言する。タスキンは、これにたいして、「遺憾ながら、確信をもって提出されたこの結論には従ひかねる。ヘルンシュタムのすべての議論は、冒頓が貴族的氏族『呼衍』の出身であるという主張にもとづいている。そして、彼の主要な誤謬もまたこの主張の中に存する。中国史料は、冒頓をもふくむ匈奴の単于たちの姓が、攀鞬 (『前漢書』)——または、若干異なった音写では虚連題 (『後漢書』)——であつて、呼衍ではなかつたことをはっきりと語っている。中国史料のこの証拠によつて、ヘルンシュタムの論拠はすべて崩壊し、それらがまったく観念的な思ひつきにすぎぬことが明らかにする」とする。タスキンの反論が正しいことはいふまでもない。

しかし、タスキンがその多くの注で展開している議論の中には、賛成できない点もないではない。匈奴における姓に関する彼の見解はその一例である。

匈奴伝には、匈奴には「姓」がなかつたとあるが、タスキンは、この条に付した注で、ほぼつぎのように言う。この記事は、一見すると、「呼衍氏、蘭氏、そしてのちに現われた須

卜氏という三つの姓が、それぞれ、匈奴では高貴の一門と考へられている (『史記』)、または「単于は攀鞬という姓の氏族から出た」 (『前漢書』) などという文章と矛盾するかのごとくである。注釈者たちが、『前漢書』にそのような叙述がないのは、班固がこれを衍字として削除したからだろうと考へたのもそのためである。しかし、「おそらく、この場合、司馬遷のテキストには矛盾はないと思われる。これに似た過程は、多分、契丹においてもおこつたものごとくである。彼らもはじめには姓を持たなかつたが、契丹帝国の形成後、すなわち、氏族制度が崩壊し、個々の貴族的家族が分離した時期になつてはじめて、耶律 (皇帝の姓) と蕭 (皇后の姓) とが出現したのである。注目に値するのは、司馬遷が匈奴の貴族的氏族についてのべるに當つて、須卜氏がほかの二つ——呼衍氏・蘭氏——よりあとになつて現われたと言つてゐることとで、これは、氏族的諸關係の崩壊、大勢力を有する貴族的家族の漸次的な分離を示すものと見なしうるのである。注釈者たちの意見に関していえば、彼らは、司馬遷のテキストと班固のそれとが、匈奴社会の異なつた発展段階をそれぞれ反映していることを見落している。『史記』は氏族制度の崩壊期の特徴をしるし、その叙述は『前漢書』に比べて、匈奴史のより早い時期に関するもので、その中に疑うべき点は何ひとつ存在せぬはずである」と。この種の議論は、ソ連の学者

たちの著書によく見られるけれども、これまた、「観念的な
思いつきにすぎず」、私は、『史記』・『前漢書』の匈奴伝の冒
頭を比較検討するならば、「匈奴社会の異なった発
展段階をそれぞれ反映している」などとは到底言えないと考
える。

本稿では若干の例しかあげることができなかったが、私は、
その他の箇所と考え合わせて、タスキンの翻訳・注釈は、そ
れらの中にときとして誤訳・誤解、または性急な「観念的」
断定が見られるもの、ビチューリンのそれに比べて
——また、ここでは触れなかったがデ・グロート(De Groot,
J. J. M.)のドイツ語訳に比べても——正確で、注意のゆき
とどいたものであると思う。外国における西突厥史の研究が
シャヴァンヌ(Chavannes, Ed.)の訳注によって、また、東
突厥史の研究が劉茂才のそれによって、それぞれ飛躍的に発
展したように、この翻訳・注釈が、とくにソ連における匈奴
史研究に今後大きな寄与をなすであろうことをのべるとも
に、本書で訳出されなかった匈奴関係史料が一日も早く翻訳
されんことを希望して、この繁簡よろしきを得ぬ紹介の筆を
おく。

(V. S. Taskin, Materialy po istorii Syunnu (po kitajskim
istočnikam), Moskva, 1968.)

センジエル・デイヴィッチオウル著 アジア的生産様式とオスマン朝社会

永田 雄 三

本書は最近世界各地で活発におこなわれているアジア的生
産様式論争に触発されてうまれたものである。しかし、標題
からうかがわれるように、本書は概念化されたアジア的生産
様式論を、それ自体として、抽象的レベルで論じようとする
ものではない。むしろアジア的生産様式といわれる概念の基
本的特徴を大づかみに把握して、これを一四・一五世紀にお
けるオスマン朝社会(といってもその直接の対象はアナトリア
とルーメリアにかぎられる)という個別具体例に適用しよ
うとする試みである。

一九六四年四月にフランスの雑誌 *La pensée* においてア
ジア的生産様式論特集が企画されたことが本書執筆の一つの
契機をなしているが、著者の真の目的は別なところにある。
それは、第二次大戦後、とくに一九六〇年代後半に入って、
トルコの進歩的な学者・知識人の間で「現代トルコ革命論」
がさかんに論議され、その論争点の一つが「おくれた」農村
社会論に集中したことから、その前提条件をなすオスマン朝
社会構造論が注目されたことと関連している。オスマン朝の
伝統的な社会構造を規定した基本制度はティマール(あるいは